

## 第6回 もっと光を

近畿大学 建築学部  
准教授 山口 健太郎



### 【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

『この沈んだ世の中に「もっと光を」』。ゲーテの最後の言葉は、いつの時代にも通じるメッセージ性を持っている。だが、この言葉は『寝室の窓のシャッターを開け「もっと光を」いれてくれ』という意味が有力らしい。今回はこのゲーテの言葉を部屋に差し込む光、そして、窓という観点から考えてみたい。

光、風、音、においなどの環境要素を制御する学問として建築環境工学がある。建築と環境は古くから密接な関係性を持ち、吉田兼好の法然草やナイチンゲールの看護覚え書の中にも興味深い言葉が記されている。

徒然草：家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬は、いかなる所にも住まる。暑き比わろき住居は、堪へ難き事なり

看護覚え書：病院の健康回復に必要なものは、混じりけのない空気、混じりけのない水、光、そして適切な食事である。これらが身体に作用したときにエネルギーの代謝が促進され、生命力が増す。また、これらのエネルギー代謝は適切な暖かさ、身体の清潔、排泄などの、要素を整備することによってさらに一層促進される。

これらの言葉から建物は「通風」や「採光」を第一条件に検討すべきと伺える。実際に日本の伝統家屋は、床を地面から上げることで床下に通気をとり、障子という可変的な家具で間仕切ることによって大きな開口をつくる。平面計画は通気や採光を容易にするため東西方向に長く南北方向に短い。さらに、南面に設けられた縁側は夏の強い日差しを遮りながらも障子を通して柔らかな光を取り

込む。

また、ナイチンゲールが考案したナイチンゲール病棟は、1室30床という大きな病室であるが、両側には大きな窓があり、窓に面してベッドを配置することで採光と通風を確保している。さらに、中央部にナースステーションを設け効率的な看護動線も確保している。

このように近代以前の人々は、外部環境との調和を重視し建築をつくってきた。かなり機能的な設計アプローチのように思えるが、結果として出来上がってきた建築は、伝統的な日本建築にしても、ナイチンゲール病棟にしても洗練された美しさを持っている。

一方、現代の設計アプローチは外部環境を遮断し、科学技術によりつくられた光や風により室内環境を制御している。照明は部屋の中に万遍なく明かりを点し、空調は快適な温熱環境を常に与えてくれる。また、このような人工的な環境制御は、建物の平面計画に自由を与えてくれる。現代の建築は、方角や奥行きを気にせず、多様な形態をつくることができる。技術の進歩は素晴らしく快適な環境を手に入れた我々にとって、光や風を建物内に取り入れてきた「窓」はもう必要がないような状況である。だが、窓の無い建物に住みたいと思う人はいないだろう。多くの人が朝起きるとカーテンを開け朝日を取り込み、窓を開けて新鮮空気を取り入れる。人々は窓を欲し、窓を必要としているのである。

さて、ここで光や窓という観点から高齢者施設について考えてみたい。まずは一般的な多床室を想定した場合、廊下側のベッドは十分な採光や通風を確保する事ができない。間仕切りのカーテンを開ければ大丈夫というご意見もあると思うが、プライバシーが全く確保されていないのも問題である。同じ多床室でもナイチンゲール病棟では、1ベッドに対して1つの窓を持ち、カーテンを開けて最低限のプライバシーを守ることができているのだから。

また、個室ユニット型の場合、居室では採光や通風を確保できるが、共同生活室においては十分でない場合も多い。共同生活室の三面を居室が取り囲み、残り一面に窓が中庭に向けて設けられている場合、中庭に十分な広さがあり、燦々とした光が注ぎ込んでいるのであれば問題ないが、無機質で建築基準法が定める最低限の採光しか確保されていない中庭の場合は問題である。窓は光や空気を取り入れる装置であるとともに、外部の景色を取り入れる装飾でもある。1つの階に複数のユニットを配置する場合には、建物の形状が正方形になりやすく、居室と共同生活室のいずれかを中庭に面して配置せざるをえない場合が多い。個人的には特養などであれば日中は居室よりも共同生活室にいる時間が

---

長くなるため、共同生活室を外部に面して配置し居室を中庭に面して配置する方が望ましいと考える。

それにしても高度な環境制御技術を持った現代人がなぜ光や風が乏しい環境で生活しなければいけないのか。それは、環境制御に対する設計士の過信と怠慢にほかならないと思う。外部環境という複雑な要素を除外し、様々な装置を取り入れれば、かなり容易に設計ができる。大学を卒業したばかりの若者が住宅の設計を任されることも普通である。あまり考えなくとも、それなりに快適な室内環境ができてしまうのである。

しかしながら、この虚構は東日本大震災によって、その脆さをあらわにした。ライフラインが停止する中で多くの高齢者施設が寒さに苦しみ、少しでも日光があたる場所に身をかためて避難生活を送っていた。

住宅の基本的な性能がないがしろにされ、専門的な技術に頼ってしまう。大学教育がそれを助長している部分もあり、建築を教える大学教員としては大いに反省しなければならない。ただ、このように考えていくと、住まいや教育をめぐる問題は闇が深い。やはり偉人の言葉は色あせない。

改めて「もっと光を」。